

## 七 躍つて出たぞ自己の性體

眞實に自己を凝視せよ、熱心に自己を探究せよ。一切は自己の姿鏡である。あらゆる物の上に自己の相を見よ。かつて何人が自己の悪相を發見せざるものがある。或人は熟々自分の身の上を考へて頻りに愚痴をこぼす。私は運が悪く、何處にも腰を落付けて居ることが出来ず、又此處へ戻つて來たのですが、今度は新聞記者にでもならうと思ふ。好い口があつたら世話して頂きたい。此方が思はしく無うて、地方へ出たのぢやつたが、何うも仲間の奴等が善くないので、又轉じて例の處へ移つて見たが、あそこでは亦上官が性の悪い人物で、とてもその下では勤められぬから、又止めて他の方へ勤めることにして、近頃まで其處に居たけれども、又私を憎む者やら妬む者やら出來て、いろく悪口など云はれたものだから、到頭其處にも居られぬやうになつて、一寸國へ歸つて見たが、私の家は叔父が專横を極めて居るので到底も居るに居られず、又かうして此處へ出て來たやうな始末。本當に私は運が悪いので困ると、いろく愚痴りながら煩悶して居ると云ふ様子。併しこれほど我身の解らぬ男もあるまい。仲間が善くない、上官が悪く、叔父が專横である、而して最後に運が悪い。是では全く自分を眺めることを知らない人である。一言も「自分が不束であるから」「自分が愚であるから」と云ふことの云へない人ほど、氣の毒なものはない。仲間が不親切に見えるのも、上官が意地悪く見えるのも、叔父が專横に見えるのも、すべて自分自身の姿が周圍の鏡に映つて居る、その影を眺めて、とんでもない思ひ違ひをして居るのではなからうか。

日本の地位ある人が始めて洋行した折の事。此處彼處と宴會に呼ばれて大に歡待せられる。けれど何處へ行つてみても、色の白い男女の間に、たつた

一人なので、何だか自分の顔の色が氣にかゝつて仕方がない。こゝぞ日本男子の本領を發揮すべき所と、力んでみはみても、云何も氣後れがする。若しも女々しい顔色でも、他客に覺られなば、一大恥辱であると氣を勵まし、やをら椅子を離れて今しも立上らんとして、ふと向を見れば、這は如何に。短軀黎面の東洋紳士と覺しき一人が、是も椅子を離れて今しも立上らんとして居る。「さて變だ、西洋にも恁な人間があるかな。何だか不細工な色の黒い男だ。いや、これは矢張東洋人だ。是迄一向知らなんだが、自分の外に、まだ東洋人が来て居たか」と心中ひそかに喜び、何とはなしに歩み出せば、彼の紳士も、同じ方向に歩み出すので、益々心づよくなり、歩みながら紳士の方を向けば、彼の方よりも此方を向く。「さては彼も我を慕ひ居るな」と向きつ向かれつ、しばゝそれを繰返しつゝ行つて、安樂椅子を見出し、それに身を横たへれば、彼も同じ姿勢で此方を見て居る。笑へば笑ふ、顰めば顰む。變な奴だと、尙も進んで顔つき出せば、額を鏡でこつん。これはしまつたり耻かしや。今まで東洋の紳士に能く似た奴と思つたのは、自分の影であつたか口惜しや。能くく調べて見れば、室内に備へられた一大鏡面に、すつくり自分の姿が寫つて居るのであらうとは。「やれく〜とんだ彌次喜太であつたな」と微笑めば、鏡中の紳士も無言で微笑む、可笑しきよ。

油斷のならぬ世界である。何處に自己の姿鏡がかゝつてあるか知れぬ。その姿鏡には、自分で自分ながら笑つて居た筈の自分が、臆面もなく幅をきかして居る残念さ。この自分と云ふものに、氣のついた時、正しく開け來るのが、如來本願の大道であります。